

# 「世の光」

## 「岡本牧師と共に味わう讚美の力」による黙想

*Takako Nojiri*



フィンランドは現在(2022年)5年連続で幸福度が世界1位の国です。生活水準の高さと充実した教育、積極的平和指数では世界1位である事等、様々な理由が挙げられます。服飾品や家具のデザイン、サウナの習慣は世界中に愛されています。

サンタクロースの国としても知られ、ラップランド地方にあるロヴァニエミでは一年中サンタクロースに会える街です。冬になるとフィンランドのサンタクロースのニュースがテレビ等で視られますが、サンタクロースの存在をそろそろ疑い始めた頃、娘はそれを見て「やっぱりサンタさんは本当にいる！」と安心していました。

また、フィンランドは日本画家の巨匠、東山魁夷を魅了してやまなかった深い森と湖、白夜、オーロラ…等の神秘的な自然を持つ美しい国として世界中から観光客が訪れています。フィンランドに行った友人は湖を船で観光し「怖いほど水が澄み切っているのでこちらの世界が現実か、水に映る世界が現実かわからなくなる」と言っていました。

その「幸福の国」フィンランドはロシアによるウクライナ侵攻を受けて、2022年5月、中立国である立場から、NATOへの加盟を申請しました。(写真：白夜)

ウクライナ戦争＝ロシアによるウクライナへの軍事侵攻が今年(2022年)の2月24日に始まって間もなく、ロシアの隣国であるフィンランドでは、首都ヘルシンキのロシア大使館の前に、多くの人々が詰めかけて「フィンランディア賛歌」が歌われました。

フィンランドは、長期にわたってロシアの支配や侵略に苦しめられ、領土の割譲を余儀なくされてきた歴史を持っています。ロシアのウクライナへの軍事侵攻はフィンランドの人々に自国が通って来た苦難の歴史の再現を見た思いであったに違いありません。

今回のエッセイは讚美歌「安かれ、わがころよ」 讚美歌「輝く日を仰ぐとき」「フィンランディア賛歌」の3曲とクリスマスイブ礼拝で説明かされた讚美歌「きよしこの夜」からの黙想を、フィンランドの作曲家シベリウスの人生とその謎と共に巡らせてみました。

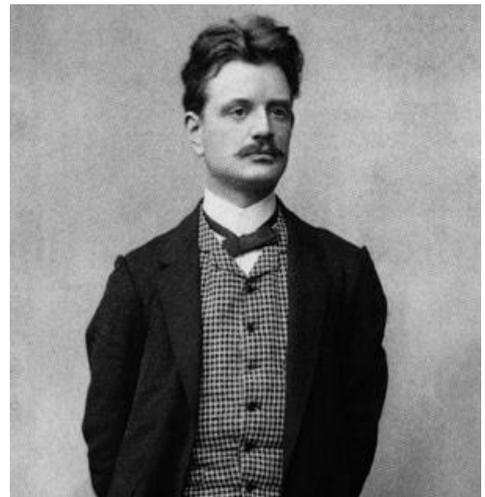
## 北欧の巨匠シベリウス

ロシア大使館の前で歌われた「フィンランディア賛歌」を作曲したのは、現在に至るまでフィンランドの随一の、と言っている大作曲家ヤン・シベリウスです。

伝記、評論等で見られるシベリウスの写真は、強面で取り付く島もないような容貌魁偉な巨漢ですが、若い頃のシベリウスは夢見るような目をした青年です。

ピアノを弾く者にとってシベリウスと言えば初めにイメージするのは「樹の組曲」「花の組曲」「羊飼ひ」「村の教会」等、自然や身近な事を題材に、繊細で透明感のある響きを持つ珠玉の作品です。それらの青年時代から書き続けた作品は、楽譜を見ると決して難解な曲ではないのに、風に震える花や、白樺の清楚な美しさや、真直ぐに空を目指すように立つ樅の木包容力を、濁りのない音で表現するのは容易ではありません。また、管弦楽曲の中には「トゥオネラの白鳥」など、どこまでも深く底知れない神秘的なこの世の果ての世界を描いているような曲もあります。矛盾した表現になりますが、「静まり返って音のない世界を音で表現している」、とも言えるような音楽です。

その一方では、一年の多くが雪と氷に閉ざされている北国の人々の作品とは思えない程、まるでマグマが噴き出す様に燃えたぎる情熱を持つ曲もあり、その両面性には限りない興味を覚えます。(写真：若い日のシベリウス)



### シベリウスの人生

シベリウスは音楽史の上では「後期ロマン派」に分類されますが、それ以上に「ナショナルロマンティズム」と言われる楽派の中の1人として大きな役割を担っていました。それは19世紀後半からの特徴的な流れで、主に北欧や南欧東欧などの中央ヨーロッパ諸国から支配を受けていた国々が、熱い民族主義的主張を音楽で表現するという楽派です。シベリウスの音楽も当時の政治、社会情勢、思想と切り離すことが出来ないものでした。

フィンランドは、国の形が出来るまでには厳しい歴史の試練を経なくてはならず、音楽家達もその流れに翻弄された事がうかがえます。

また、シベリウスの人生には楽壇の権力の争い、金銭的な問題、ストレスによる鬱病、アルコールの問題、悪性腫瘍等との絶え間ない闘いがありました。シベリウスが誕生したのは1865年という2世紀前の事だったので、つい遠い歴史上の人物と考えてしまうのですが、1957年が没年だった事を考えるとそう遠くない案外身近な時代に生きた人間だったという事が分かります。

## アイノとの結婚

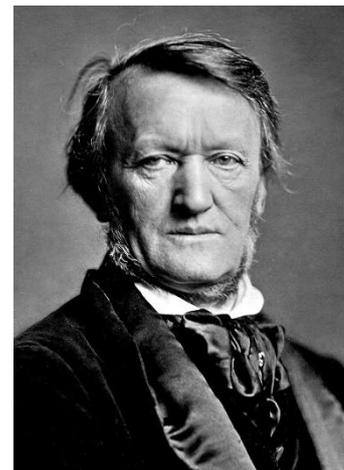
シベリウスは若い時から才能を認められ、国から経済的な保証を与えられるという音楽家としては比較的恵まれた地位にいたといえます。シベリウスといえば代名詞ともなった交響詩「フィンランディア」を始め、7つの交響曲、フィンランド民族の伝説や物語を題材にした管弦楽曲や合唱曲、カンタータなど、壮大で深淵な曲の作曲者であるイメージが強いのですが、人間としてのシベリウスは、人前で演奏することが苦手であり（あがり症のためにヴァイオリン奏者として活躍する事を断念）、ごくわずかなストレスによっても暴飲暴食や自堕落とも言える行動をして身体を壊すなど、極めて繊細な面がありました。



一方で、国一番の美貌と賢さを歌われた女性、**アイノ・ヤーネフェルト(1871~1969)**を妻にして家庭的には恵まれ6人の娘を得ました。自由奔放で神経質な芸術家肌のシベリウスと、良妻賢母型のアイノは生涯相容れない部分があったといわれますが、1892年に結婚してから55年、シベリウスが92歳で没するまでアイノはシベリウスに寄り添って結婚生活を全うします。(写真：アイノ・ヤーネフェルト)

## ワーグナーへの傾倒

シベリウスは若い頃、この時代の作曲家達の多くに浸透していた**ワーグナー(1813~1889)崇拝**の渦に巻き込まれています。ワーグナーの音楽は、ゲルマンの伝説に題材を得て、ゲルマン民族の偉大性を前面に歌い上げ、果てしなく続く旋律と聞くものを圧倒的する音量の力強さで迫り来る音楽を、作曲しました。また、バロック以来の伝統的な音楽技法を破り、新しい音楽の形の開拓者として後に続く作曲家達を魅了し、「**ワグネリアン**」と言われる崇拝者達を生み出しました。ワーグナーのオペラは「**楽劇**」と呼ばれ、物語性の大きさ、登場人物の激情的な個性、管弦楽の可能性を拡大した過剰なほど豊饒な響き、舞台装置、舞台美術、演出のこだわりなど、それまでのオペラの枠を大きく超えた革新的なものでした。(写真：リヒャルト・ワーグナー)



ワーグナーに傾倒した一人に**バイエルン国王ルードヴィヒ二世(1845~1886)**がいます。若き国王はワーグナーの音楽を崇拝するあまり、ワーグナーに多大な支援を行い、ワーグナーの楽劇の舞台である中世の城を模して、**ノイシュバンシュタイン城**、**リンダーホフ城**、**ヘレンキームゼー城**等々を築城して莫大な国費を浪費し、怒った民衆によって退位させられ、

幽閉されて湖で謎の水死をします。そして皮肉なことにそれらの城は今、ドイツ観光の重要な資源となっています。ルートヴィヒ二世が家来に捕えられたノイシュバンシュタイン城はディズニーのシンデレラ城のモデルとなって、遙か東の日



本にもその姿を見せています。(写真：ノイシュバンシュタイン城とルートヴィヒ二世)

ともあれ、ワーグナーの登場は間違いなく音楽の歴史の転換点となりました。そしてアンチ・ワーグナーを含め、それ以後の作曲家達は多かれ少なかれその影響を受けることになります。そしてワーグナーの**ゲルマン民族第一主義**とも言える音楽はヨーロッパの国々がそれぞれに持つ自国のアイデンティティーを目覚めさせ、民族的な特色を強調した「**ナショナルロマンティズム**」に拍車をかけたとも言えるのではないかと思います。私論ですが、結果的にそれが自国の優位性を強調し、自国の利益のみを追求していく「**自国ファースト**」の思想を増幅する一因になったかもしれないと、私は考えています。

独裁者**アドルフ・ヒトラー(1889~1945)**が熱烈なワーグナー崇拝者であった事は有名な話です。ヒトラーはワーグナーの楽劇からヒントを得て劇的な演説やパフォーマンスで、自分を英雄として演出していき、大衆を魅了していったのです。

シベリウスも初期にはワーグナーの壮大な音楽やナショナリズム的な部分に影響を受け、民族の伝説や「**フィンランドの民族精神**」を題材にした長大な作品を多く作曲しています。それは純粋に音楽的な影響だけでなく、フィンランドの民族独立の機運を高める為に、国が右傾化していく状況からも、避けることのできない事でした。

## リヒャルト・シュトラウス

また、シベリウスはウィーンに留学していた 24 歳の時に一つ年上のリヒャルト・シュトラウス(1864~1949)と親交を持っていました。リヒャルト・シュトラウスはワーグナーの後継者と言われるほど才能豊かで、しかも夢想家のシベリウスとは正反対の現実主義者であったという事です。19 世紀末から 20 世紀前半にかけての大作曲家に名を連ねることになった若き日の二人は、対照的な性格ながらお互いの才能を認め合い、響き合うものがあつたといひます。シュトラウスには 1896 年の交響詩「ツァラトウストラはかく語りき」1905 年作曲の「サロメ」(オスカー・ワイルド原作)、1917 年の「影のない女」、など近代人の思考を反映した題材の作品も数多くあります。しかしやがてリヒャルト・シュトラウスは、ドイツ至上主義の思想の元で活動の域を広めていき、ナチスの音楽監督となり、権力の座につきます。(写真：シュトラウス)



一方シベリウスは、ワーグナーへの熱狂からしだいに違和感を覚えるようになり、やがて自分の進む方向を変えていきます。ワーグナーの影響から脱したシベリウスは、次第に民族的主義的なものを超えた絶対的な音楽を追求することになっていきます。

## 「フィンランディア」

そのシベリウスが 34 歳から 35 歳に欠けて作曲したのが、後に讃美歌「安かれ、わがころよ」の旋律として使われた「フィンランディア」です。

「フィンランディア」は、彼が 34 歳の 1899 年から翌 1900 年にかけて作曲されました。

当時のフィンランドはロシアの支配下にあり、弾圧が厳しさを増した暗黒の時代でした。ロシアのフィンランド総督ニコライ・ボブリコフ(1839~1904)は、フィンランド国民にロシア皇帝ニコライ二世への絶対的な服従を要求し、フィンランド自治権の廃止、報道規制や、法律や言語等あらゆる分野での「ロシア化」に向けて締め付けが厳しくなっていました。新聞、ジャーナリズムへの検閲が強化された中で報道の自由を訴える勇気ある人々は「報道記念日」を催し、祖国の民族団結の意識の高揚を図るためにフィンランドの歴史と勝利を描いた舞台劇「歴史的情景」の上演を計画します。その舞台に付随する音楽の作曲を任されたのが当時 34 歳だったシベリウスです。

舞台は大成功をおさめました。舞台音楽は全部で 6 曲から成り、フィンランドの苦難の歴史と輝かしい未来を描いた第 6 曲目の「フィンランドは目覚める」は、特に聴衆の熱狂を得ました。そして、独立した音楽として改訂され、演奏されるようになったものが交響詩「フィンランディア」です。

「フィンランディア」は曲の終わりに「アーメン終止」が使われています。教会で歌う讃美歌の最後に歌う「アーメン」と同じ和音進行が使われているのです。クラシック音楽において、「アーメン終止」は、祈りを象徴しています。後に讃美歌に、また第二の国歌として歌われるようになるとは夢にも思わなかったであろうこの時、「フィンランディア」は既に祈りの曲だったのです。

「フィンランディア」は愛国心を煽るとして、帝政ロシアから何度も演奏禁止を命令されましたが、その都度曲名を変えるなどして演奏され、愛され続けました。1900 年に行われたパリ万博でも、ヘルシンキフィルハーモニーによって演奏されています。「交響詩フィンランディア」は現在になっても尚シベリウスの代名詞と言えるほど知名度の高い曲になりました。

シベリウスは日記に書いています。

「どうしてこの交響詩は多くの人々に心をつかんで離さないのか… (中略) 楽想はまるで天上から降ってくるように自然と浮かんだものなのだ。」

## 娘キルスティの死

そんな時シベリウス夫妻に試練が降りかかります。「フィンランディア」の大成功の直後に3番目の娘であるキルスティをチフスで失ってしまったのです。わずか1歳と3か月の「天使のようだった（シベリウスが語った言葉）」娘を失ったシベリウスとアイノの心には大きな傷が残り、キルスティをととても愛していたシベリウスは、酒に溺れてすさんだ日々をおくるようになります。というのも、シベリウスは1898年にキルスティが誕生する前に、作品18のアカペラの男声合唱曲の第6曲目に「我が子を安らぎの世界に送る」という歌を作曲しています。讃美歌「安かれわがこころよ」を思わせる深い祈りの込められた曲です。

幼い娘の死の事実に加えて、まるで我が子の死を予感していたような歌を作曲していたという事に打ちのめされてしまった為の、感情の落ち込みではなかったのかと思われます。

シベリウスのこうした激しい感情の起伏、現実逃避傾向の性格からの飲酒癖は生涯彼を苦しめ、彼の精神も蝕み、時にはアイノとの距離が遠くなる事もありました。1914年の第1次世界大戦の勃発、1917年のロシア革命、ソビエト連邦の成立、その後のフィンランドの独立、1918年のフィンランドの内戦等、フィンランドは激変の時期を迎えます。シベリウスにとっても思想的な疑いから家宅捜索を受けるなどの、身の危険を感じざるを得ない状況となり、飲酒は過度になっていきました。

一方活躍の場は広がり海外への演奏旅行も盛んになりましたが、その最中に酩酊して本番で大恥をかく場面もあったといえます。

## 「ヤルベンヴァーの沈黙」の謎

それから9年経った1927年、自他共に認めるフィンランドを代表する作曲家となっていたシベリウスは突然、謎の隠遁生活に入ってしまう。没するまでの30年間大作を一切書かないという音楽史上、大きな謎とされる「ヤルベンヴァーの沈黙」と言われる30年です。ヤルベンヴァーはヘルシンキ郊外に建てた妻の名の「アイノ」にちなんで「アイノラ」と名付けた家に、引きこもってしまったのです。（写真：アイノラ）



戦争や政治や権力に芸術が翻弄される生活に疲れて「アイノラ」での生活で自然の中で生きることを選んだのはシベリウスにとっては必然であったかもしれません。沈黙の理由としては、難病だった、2つの世界大戦やロシアによるフィンランド割譲などの激動する時代

の厭世感、アルコールの問題、創作意欲の喪失等々様々な説がありますが今でもはっきりした理由は分かりません。心理学、精神病学的な考察を試みている学者もいます。

そんな時に讃美歌「安かれ、わがころよ」と、90年後の2022年にヘルシンキのロシア大使館で歌われた「フィンランディア賛歌」が成立したのです。

## 讃美歌「安かれわがころよ」

2022年9月の「岡本牧師と共に味わう讃美の力」で取り上げられた「安かれ、わがころよ」は、前述のようにシベリウスの「フィンランディア」の中間部の旋律を用いた讃美歌です。

岡本先生の資料1-(2)にありますように1932年にアメリカ長老派の讃美歌編集委員会は、讃美歌集「The Hymnal 1933」にカタリーナの詩をスコットランド人のジェーン・ローリー・ボースウィック(1813~1897)が英訳した歌詞に、「フィンランディア」の旋律を用いるためにシベリウスに編曲を依頼、シベリウスは快諾しました。

### 修道女カタリーナ

オリジナルの作詞者は、ドイツの修道女カタリーナ・A・D・フォン・シュレーゲル(1697~1768)、カタリーナについては、残念ながらほとんど資料が見当たりません。今手に入るわずかな資料によると、彼女はドイツのケーテンに生まれ、そこでドイツ福音教会の修道女長となり、オルガニスト、指揮者、作曲家としても活躍した女性だったという事です。

カタリーナは、ヨハン・セバスチャン・バッハ(1685~1750)とほぼ同じ時代に生き、バッハは1717年から1723年までをカタリーナと同じケーテンで、宮廷楽長としてケーテン侯レオポルドに仕えています。レオポルド侯は音楽への関心が非常に高く、自ら設立した宮廷楽団にバッハを迎えました。カタリーナが所属していた教会でバッハが音楽監督をしていたという記述があります。バッハにとってこの「ケーテン時代」と言われる時期は、初めの妻マリア・バルバラ(1684~1720)を亡くし、二人目の妻アンナ・マグダレーナ(1701~1760)との再婚という人生における大きな出来事があった時期です。アンナ・マグダレーナはバッハと同じケーテン侯レオポルドの宮廷で歌手として働き、自分自身も優れた音楽家であったことから、年の近いカタリーナとその夫バッハとの交流があったかもしれないという事は容易に想像されます。

もしかしたらカタリーナのオリジナルの讃美歌にはバッハが何かの影響を与えたのではないかと考えるのも不可能ではないと思えます。

また、岡本先生の資料1-(1)にありますように原詩の「Stille, mein Wille! Dein Jesus」は1752年に出版された「ケーテン讃美歌集」に収録されています。以下のサイトにもドイツ語の原詩が載っています。

[Stille, mein Wille! Dein Jesus hilft siegen \(musicnet.org\)](https://musicnet.org/stille-mein-wille-dein-jesus-hilft-siegen)

初めのカタリーナの歌詞から 180 年の時が経って「安かれ、わがころよ」は今歌われている形になりました。

「アーメン終止」を持つ「フィンランディア」は本当の讃美歌になったのです。

## 讃美歌「輝く日を仰ぐとき」

2022 年 11 月の「讃美の力」では讃美歌「輝く日を仰ぐとき」が取り上げられました。岡本先生の資料 3 には、この讃美歌の英語版の歌詞が、どのような過程を経て現代のバージョンになったかが記されています。元々の歌詞はスウェーデンの牧師カール・ホバーク(1859~1940)によって 1885 年にスウェーデン語で作られた詩に、数年後会衆が古いスウェーデン民謡の旋律を当てはめて歌っていたという事です。そのいきさつは岡本先生の資料 3 に記されています。

ホバーク(1859~1940)とシベリウス(1865~1957)は、ほぼ同じ年代に生きていました。ホバークはスウェーデン人、シベリウスはフィンランド人ですが、フィンランドは 1809 年にロシアが支配する以前にはスウェーデンの支配下にありました。そのため、フィンランドはスウェーデン語を話す上層階級の人々とフィンランド語を話す人々がいました。シベリウスはスウェーデン語を話すグループに属していましたが、後にフィンランド語を使う学校にも行き、猛勉強をしてフィンランド語を使えるようになったといいます。前述のフィンランドの内戦は、このスウェーデン語を話す人々と、フィンランド語を話す人々との階級闘争でもありました。

シベリウスが讃美歌「安かれ、わがころよ」の編曲をした 1932 年から、ウクライナでは「ホロモドール」という人為的な飢餓による大量虐殺が起こっていました。

ウクライナ伝道に従事する間にロシア語で歌われているこの讃美歌の歌詞の英語版を生み出したハイン夫妻はホロモドールのためにウクライナから離れました。その経緯は岡本先生の資料に書かれています。その頃のウクライナの凄まじい飢餓の映像を、NHK のテレビ番組「新映像の世紀」で見た事がありますが、それは「収容されていないユダヤ人収容所」のような凄惨なものでした。文字通り骨と皮にやせ細った動かない人々、横たわった子供達、飢餓で亡くなった人の死体を食べたという証言、麦の 1 粒に至るまでのわずかな農作物を奪い取る役人達…その農作物は外国に輸出され、それで得た外貨はソビエト連邦の独裁者スターリンが政策に掲げた「ソビエトの近代化」の為の資金となりました。ウクライナでは推計でおよそ 600 万人が飢餓で命を失っています。

「安かれ、わがころよ」と、「輝く日を仰ぐとき」の 2 つの讃美歌の歌詞は、時代の

きな渦の中で軌を一に成立していくこととなります。

人の心を深く捉える 2 つの讃美歌は、ロシアと北欧の複雑に絡み合う人々の苦しみの歴史から生まれ、その悲しみを突き抜けて神への信頼と希望を歌い上げているのです。

また同じ頃の 1933 年、ドイツではヒトラーがナチス政権の下で政権に寄り添った形で信仰を誘導する「ドイツ福音主義教会」を設立していました。ディートリヒ・ボンヘッファーなどの心ある牧師達、また信徒達はそれに抵抗し「告白教会」ができます。このことは信仰のあるべき姿の大きな問いかけで、今日も決して忘れてはならない事だと考えます。

## 「フィンランディア賛歌」

それから 9 年後の 1941 年、「フィンランディア」の中間部の旋律に詩人のヴィエッコ・アンテロ・コスケンニエミ(1885~1962)が歌詞を書き「フィンランド賛歌」として編曲され、合唱で歌われるようになりました。コスケンニエミはフィンランドの詩人、文学者、文学評論家として知られ、その愛国的で抒情的な詩はフィンランドの作曲家に一番多く曲が書かれているほど人気があった詩人です。彼はとても多彩な人物で天文学の愛好者でもあり、1940 年に彼の発見した新星には彼の名がつけられています

そして「フィンランディア賛歌」は第 2 の国歌として正規の国歌より親しまれ、フィンランドの国民的な愛唱歌になったのです。

2022 年 3 月、ヘルシンキのロシア大使館前で歌われた「フィンランド讃歌」は「スオミ (フィンランド)」という歌詞を「ウクライナ」と変えてフィンランドの市民が大合唱しました。その歌詞を和訳したものの一つを web サイトから引用します。

### フィンランディア賛歌 歌詞 (原曲)

おお、スオミ (「ウクライナ」と歌われました)

汝の夜は明け行く

闇夜の脅威は消え去り

輝ける朝にヒバリは歌う

それはまさに天空の歌

夜の力は朝の光にかき消され

汝は夜明けを迎える 祖国よ

おお、立ち上がれスオミ 高く掲げよ

偉大なる記憶に満ちた汝の頭を

おお、立ち上がれスオミ 汝は世に示した

隷属のくびきを断ち切り

抑圧に屈しなかった汝よ  
汝の世は明けた祖国よ

[引用 フィンランディア賛歌 歌詞の意味 シベリウス \(worldfolksong.com\)](http://worldfolksong.com)

## 続く沈黙

シベリウスの謎の沈黙は続きます。

「神は我がやぐら」のエッセイで書いたように、シベリウスは「フィンランディア賛歌」が合唱曲として編曲された 1941 年に演奏旅行でヘルシンキを訪れた近衛秀麿と積極的に会って語り合う時をもっています。シベリウスは近衛秀麿との面会を喜んで、自ら足を運んで近衛を迎えたといっています。

北欧の巨匠と、極東の鬼才が何を話し合ったのか、残念ながらその資料は残っていません。(写真：近衛秀麿)



第 2 次世界大戦の前後、フィンランドは更に激動の時期を迎えました。2つの大戦を、ロシアとドイツの間で揺れ動き、フィンランドは戦犯国となってしまいます。

遠い昔に芸術について熱く語り合ったリヒャルト・シュトラウスは第 2 次世界大戦後、ナチスの協力者として連合国の裁判にかけられましたが無罪となり 1949 年 85 歳で生涯を閉じました。戦後のリヒャルト・シュトラウスもまた、表舞台から遠ざかり、大作を完成させる事はありませんでした。

リヒャルト・シュトラウスが亡くなる 1 年前に書いた最後の作品、「最後の 4 つの歌」は静かな諦観に満ちている不思議な作品です。

戦後フィンランドは経済成長を遂げ、社会福祉、教育が充実した国に発展します。そんな中もシベリウスは沈黙を続けたまま 1957 年に 92 歳で世を去りました。

シベリウスは白夜の国で 1 人、どのように世界を見続けその心の中にはどのような思いがあったのでしょうか。

シベリウスに寄り添い続けたアイノも長寿を全うして 1969 年に 98 歳で世を去ります。

そして、今再び「安かれ、わがころよ」「フィンランディア賛歌」が作曲された時と同じ闇が世界を覆っています。科学の発展で、もっと恐ろしい恐怖を伴う闇です。

「ヤルベンヴァーの沈黙」の謎は未だに解明されていません。

## 「世の光」

### 2022年12月24日クリスマスイブ礼拝「きよしこの夜」

日本時間 2022年12月25日の朝8時から、JCCC シンシナティ日本語教会のクリスマスイブ礼拝（現地時間で24日午後6時）が行われました。

岡本雅幸牧師による聖書箇所「ルカによる福音書」第2章8節から16節に関するメッセージと、讃美歌「きよしこの夜」の説き明かしが行われました。

クリスマスの歌として、クリスチャン以外の人々にも最も親しまれている歌「きよしこの夜」、この歌は通常は楽譜に第3番までの歌詞が記されているのですが、岡本先生が資料にあげてくださったように、本当は第6番まであって第3番とされているのは第6番であること、歌われない第3~5番の歌詞には重要なメッセージ、世界を包み込む深い神の愛と救いが描かれている事が説かれました。



改めて全ての歌詞を読み、世界が戦争や疫病や飢餓、環境破壊、カルトなどの問題を抱えている今こそ、この歌の全ての歌詞を祈りと希望と共に歌わなくてはならないと強く思います。

また、岡本先生のお話の中で12月24日にNHKで放送された、現在のウクライナで人々がクリスマスをどう過ごしているかを取材した報道番組の事がありました。

私も偶然その番組を見ていました。実は番組が始まる前は、ウクライナ情勢をテレビで見る度にいつも感じるような辛く悲しい気持ちになるのだろうかと思わず少し重苦しい気持ちを持っていました。

ウクライナでは連日の空爆で民間施設、特に電力施設を始めとした生活インフラを司る施設が破壊されています。家庭や病院などへの電力供給が出来なくなり、市民たちは、寒く、暗い日常を余儀なくされているのです。ゼレンスキー大統領はクリスマスから新年にかけて大規模な攻撃があるかもしれないという警告を発していました。現にクリスマスにも年末年始にも攻撃は続き、電力施設が次々と破壊されています。

12月24日のその報道番組の2日前の12月22日にはゼレンスキー大統領がホワイトハウスを電撃訪問し、バイデン大統領と会談、その後アメリカ議会で演説を行なったというニュースが流れました。戦争中、軍の最高司令官でもある大統領が危険な中で大陸を越えて他国を訪問したということ、またその演説の内容に衝撃と共に心を打たれた人は多かったのではないかと思います。その演説の中で大統領はこう訴えました。

「我々はクリスマスにろうそくを灯すでしょう。しかしそれはロマンティックな意味ではなく、ろうそくしかないからだ」

ロシアは冬を武器にしているのだ、寒さによる再びの大量虐殺なのだ、と。

しかし24日の報道番組を見て驚いたのは、ゼレンスキー大統領の言うようにロシアからのミサイル攻撃によって、電力の供給が乏しい「キャンドルしかないクリスマス」であっても、日々の空爆の恐怖の中にあっても、人々の顔がクリスマスを待つ喜びに輝いていた事です。主の降誕を祝い、その祝福を信じる喜びがそこにはありました。確かに戦禍の中で人々に照らされている灯りは華やかな煌びやかなものではなくとてもとても小さいものですが、闇を打ち負かす力を持つ強いものなのだ、という事を目の当たりにしました。

それは「キャンドルがあるクリスマス」で、これが「世の光」なのだ、と。

## 終わりに

実はこのエッセイは9月の「安かれ、わがこころよ」の「讚美の力」のすぐ後に書き始めてから既に3か月以上が経過して、更に年も越してしまいました。

刻々と変わりゆくウクライナの戦況、またそれによって引き起こされ、変わりゆく世界の情勢に触れるたびに心が痛んで苦しくなり、そのたびに原稿を打つ手が止まってしまっていたのです。

繰り返されるパンデミックと戦争、独裁者による破壊、虐殺、憎しみ…1世紀前と全く変わらない繰り返しを、人類は何故繰り返し延々と続けているのか…

それが、12月24日のクリスマスイブに、ウクライナの人々のクリスマスを待つ笑顔をテレビの画面で見、12月25日の朝シンシナティ日本語教会のクリスマスイブ礼拝（現地時間）で岡本先生のメッセージを聞き、「きよしこの夜」の歌われない歌詞を知り、心に光が注がれたように息苦しきから解放されて再び言葉が息を吹き返して動き出しました。

この世に平安をもたらす方が来られたではないか、と。

この世に愛を注ぐ方が、初めからあったではないか、と。

最後に岡本先生の資料から、「きよしこの夜」の3、4、5番の歌詞からの抜粋をここに写させていただきます、長い時間がかかったこのエッセイを閉じたいと思います。

## 讚美歌「きよしこの夜」より

今宵、この世に平安がもたらされた、  
金のように輝く天の高きところより、全能の神は溢れるほどの慈悲を示された  
イエスが人の姿となって

今日、全能の神は  
慈悲の愛を注ぎ  
イエスは兄弟として慈悲深く  
世界の民を包み込む

久しく我らは望み続けた、  
憤怒より我らを救いたまえ。  
遠い昔、我らの父祖の時代から神は  
全ての民に思いやりの心を約束した

- 参考文献 「シベリウス」 神部 智  
「シベリウスの交響詩と祖の時代」 神部 智  
「西洋音楽史大図鑑」 スティーブン・コリッソン 藤村奈緒美訳  
「シベリウスと宣長」 新保祐司  
「北欧の巨匠」 作曲家別名曲解説ライブラリー 音楽の友社  
「物語 フィンランドの歴史 北欧先進国バルト海の乙女 800 年」 石野祐子  
「キリスト教の 2000 年」 ポール・ジョンソン 別宮貞徳訳  
「キリスト教史の学び」 越川弘英  
「フィンランドのドイツ戦車隊」 カリ・クーセラ 斎藤伸生